

ヘマトキシリン・レーキ法を用いた アルミニウム染色法の基礎的検討

宮川 誠¹, 安藤 博文¹, 坂本 吉正¹, 石黒 敏一², 大門 建夫³

¹ 帝京大学医学部中央動物室, ² 帝京科学大学アニマルサイエンス学科, ³ 帝京大学医学部解剖学教室

アルミニウムは、アルツハイマー型痴呆症の原因でないかと疑われているが、中枢神経系の組織内のアルミニウムの分布などについては、いまだに不明な点が多い。また、以前から、アルミニウムの毒性や中毒の実験など行われてきているが、アルミニウムの組織内分布についての確かな結果は報告されていない。この原因として、投与方法の問題と染色法の問題が考えられる。そこで、今回、各種投与方法による、ラットアルミニウム中毒実験モデルを作成し、代表的なアルミニウム染色方法の比較検討を行った。また、従

来より、アルミニウム染色には、岡本法などのアルミニオン (aluminon, ammonium aurine tricarboxylate) 法やクロマズロール B 法など様々な方法が試みられているが、特異性の高い染色法は少ない。今回、ヘマトキシリン・レーキ法がアルミニウムの染色にきわめて有効であることが判明した。この方法の染色条件について、溶媒や溶媒濃度、染色温度などを検討したので、あわせて報告する。本法は生体内におけるアルミニウムの局在を染色する際、アルミニウムの染色法として有用である。